

10. 自殺企図者における過量服薬に関する実態調査

渋澤知佳子、小泉典章（長野県精神保健福祉センター）、松本清美（上田保健福祉事務所）

塚原照臣、野見山哲生（信州大学医学部公衆衛生学講座）

キーワード：自殺企図者、過量服薬、自傷行為、ゲートキーパー、薬剤師

要旨：自殺企図の手段として過量服薬があり、精神科や一般科による向精神薬等の処方の問題が以前から検討されている。長野県では、自殺企図事例の状況について調査を行い、最も多い企図手段であった過量服薬について分析を行った。その結果、過量服薬による自殺企図が多い性別・年代は、20代、30代女性であり、服薬した薬物は精神科の処方薬が最も多かった。自殺企図歴は自殺の最も強い危険因子と言われており、再企図による自殺既遂を防ぐため、医師だけではなく、薬剤師など他職種もゲートキーパー的役割も持ち、服薬状況や自殺企図について配慮していくことが大切だと思われる。

A. 目的

自殺企図者の自殺手段と、過量服薬を行った際に服用した薬物について明らかにし、薬の処方や関係機関の関わりについて今後の課題を明確にする。

B. 方法

①調査対象

表1 調査対象

	配布 (機関)	回収 (機関)	回収率 (%)
休日・夜間当番医療機関	178	54	30.3
救急告示医療機関	83	46	55.4
精神科標榜医療機関	98	66	67.3
消防機関	14	14	100

②調査方法

診療ならびに搬送体制について問う総括票と、自殺企図者個別調査票（個票）を郵送により配布した。

③調査時期

平成23年6月1日～6月30日の間における自殺企図者。7月～8月にかけて郵送による回収を行った。（救急告示医療機関と精神科標榜医療機関に搬送された自殺企図者と、消防機関に搬送された自殺企図者が重複していることが考えられる。）

④調査内容

自殺企図者の状況（自殺企図の手段、精神科処方歴、薬物名、薬物の入手方法、服薬量）

C. 結果

(1) 休日・夜間当番医療機関：54機関において自殺企図事例の受診はなく、個票の記入はなかった。

(2) 救急告示医療機関：46機関のうち26機関において自殺企図事例による受診があり、返信された自殺企

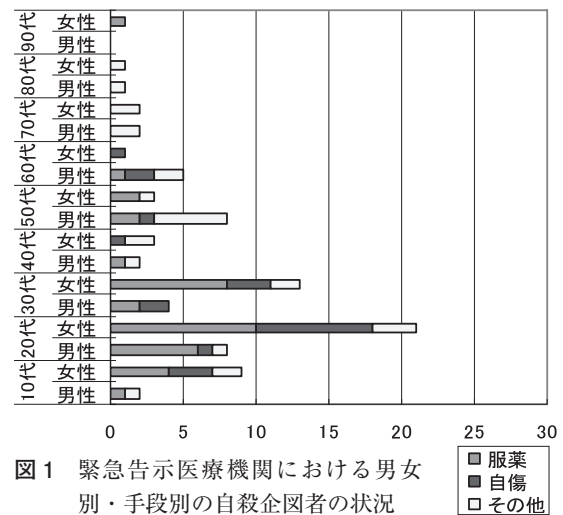


図1 緊急告示医療機関における性別・手段別の自殺企図者の状況

図事例79件を本調査の解析対象とした。79件のうち、服薬による自殺企図を行ったのは40件（50.6%）と最も多く、性・年齢別では20代女性が最も多かった（図1）。次に、服薬による自殺企図を行った40件で服薬した薬物は、デパスが9件と最も多く、以下レンドルミン、ロヒプノール（それぞれ5件）であった。入手方法は、精神科処方薬が31件（77.5%）と最も多く、精神科以外の処方薬3件（7.5%）、薬局の市販薬3件（7.5%）であった。服薬量は数錠から100錠以上、不明も多かった。

(3) 精神科標榜医療機関：66機関のうち23機関において、返信された自殺企図事例90件を本調査の解析対象とした。90件のうち、服薬による自殺企図を行ったのが41件（45.6%）と最も多く、性・年齢別では30代女性が最も多かった（図2）。次に、服薬による自殺企図を行った41件で服薬した薬物は、デパスとロヒプノールがそれぞれ6件で最も多く、以下パキ

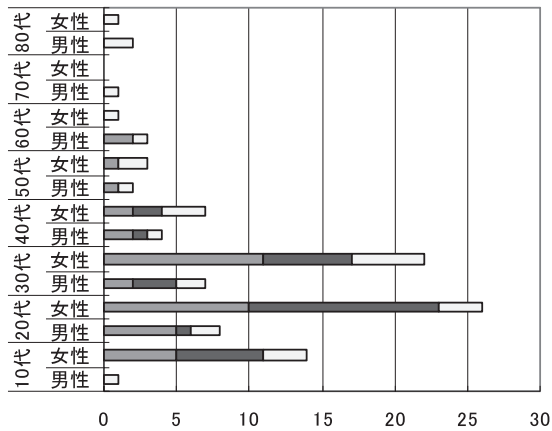


図2 精神科標榜医療機関における男女別・手段別の自殺企図者の状況

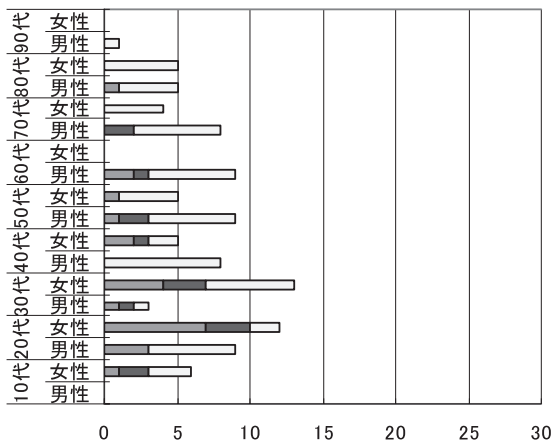


図3 消防機関における男女別・手段別の自殺企図者の状況

シル (5 件) であった。入手方法は、精神科処方薬が 31 件 (75.6%) と最も多く、薬局の市販薬 4 件 (9.8%)、精神科以外の処方薬 1 件 (2.4%) であった。服薬量は数錠から 100 錠以上、不明も多かった。

(4) 消防機関：14 機関すべてにおいて自殺企図事例の搬送があり、返信された自殺企図事例 88 件を本調査の解析対象とした。88 件のうち、服薬による自殺企図を行ったのが 23 件 (26.1%) と縊首による自殺企図 (図中その他に該当) に続いて多く、性・年齢別では 20 代女性が最も多かった (図 3)。次に、服薬による自殺企図を行った 23 件で服薬した薬物は、デパスが 5 件と最も多く、以下不明 (4 件)、ソラナックス、ベンザリン、マイスリー、レンドルミン、睡眠薬 (それぞれ 2 件) であった。入手方法は、精神科処方薬が 15 件 (65.2%) と最も多く、精神科以外の処方薬 1 件 (4.3%)、薬局の市販薬 1 件 (4.3%) であった。服薬量は数錠から 100 錠以上、不明も多かった。

(※表記は回収データの記載に基づいて商品名とした)

(5) 全体のまとめ

3 機関から得られた 257 件をまとめると、過量服薬による企図は企図者全体の 40.5% と高く、性別・年代は 20 代や 30 代等若年層の女性が多かった。その際に使用した薬物は精神科処方薬が 74.0% と高かった。

D. 考察

長野県の平成 23 年 6 月の自殺既遂者は 57 名で (警察庁統計による)、その 57 名のうち、42 名が男性で、40 代から 70 代が多かった。

一方、本調査での自殺企図者は 20 代女性等、若年層に多く、既遂者と企図者では、該当する性別や年代が異なった。警察庁統計では、自殺既遂者の 15 名の女性のうち、9 名に自殺未遂歴があった。自殺未遂歴は自殺既遂の最も強力な危険因子と言われており (河西、2008)、再企図による自殺既遂を防ぐためにも、過量服薬による自殺企図者への支援が必要である。

また今日、精神科における薬の処方について、問題提起されており、処方の種類や量や処方日数など十分な配慮がなされつつある。しかし、処方後の薬の管理を主治医がすべて行うことは困難と考えられる。薬剤師や保健師などが服薬指導を行い、患者と薬について話をしたり、必要があれば主治医に連絡を入れるなど、医師だけではなく、他職種もゲートキーパー的役割も持ち、服薬状況や自殺企図について配慮していくことが大切だと思われる。

E. まとめ

今回の調査を通じて、以前から指摘されていた、過量服薬による自殺企図の実態の一部が明らかになった。過量服薬による自殺企図について、今後さらに、多職種連携を含めた対策を検討していく必要がある。

F. 文献

- 1) 信州大学医学部衛生学公衆衛生学講座：自殺企図者支援に関する実態調査報告書. 2012.
- 2) 内閣府経済社会総合研究所：地域における自殺の基礎資料 (警察庁提供データ). 2011.
- 3) 河西千秋：救命救急センターにおける自殺未遂者への支援と自殺再企図予防方略の開発。学術の動向 13 (3) : 39-43, 2008.
- 4) 厚生労働省自殺・うつ病対策プロジェクトチーム：過量服薬への取組—薬物治療にのみ頼らない診療体制の構築に向けて—。2010.
- 5) 嶋根卓也：薬剤師から見た向精神薬の過量服薬。精神科治療学, 27 (1), 87-93, 2012.